

## 落葉の頃

森本 眞智子

今年 いつまでも未練気に立ち去ろうとしなかった夏がようやく終わり  
秋が 足早に歩を進めてゆく  
梅の木は とうに丸坊主になり  
はなみずきは紅葉した葉を大袈裟に庭中にふりまいて  
終わろうとしている

この秋私は 手のひらから滑り落ちていった陶器のように  
一つの思いが砕けて散った  
立ち直れない心を持って余して くだんとつぶれている  
つぶれたまま 自分を裏返してみる  
私の中に眠っている 気づかなかった異質なわたし

地上に降りた鳩ほどにも臆病だったり  
すぐ後ろ向きになる気弱な自分がいたり  
意外な頑固さも 短気も見え隠れする  
単純に名づけられない多くのものたちが  
裏返したポケットから あふれだしてくる

ひとりの人間の中には  
なんと多くの性(さが)が息づいていることだろう  
私が引きずっている根の先には  
祖父や祖母 遠い祖先につながる根が  
からまりあって 私を形成している  
澱みの中にはまだ私の知らない自分がある

人はみな天動説

人はみなナルシスト

開け放った窓から空をみている

雲一つない青空は 嫌いだ

「嘘つき！」と叫びたくなる

いっばい隠しているものがあるでしょう

私はつぶれた心のまま 触手をのばして 引き合う誰かの手を探している